

平成27年11月1日発行 春燈/第70巻第11号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

November 2015

11月号



主宰の句

安立公彦

ひとすぢの懐旧いまも盆の月

苦瓜を大事に育て市民たり

葛の花高きに揺るる迢空忌

秋濤を四方に夕清む灯台光

火の山を宥むる入江星月夜
(錦江湾)



久保田万太郎の句

鶏頭に秋の日のいろきまりけり

『草の丈』昭和二十七年

美しい句である。澄んだ秋の日をあびた真紅の鶏頭の
あざやかさを、炎ゆ、燃ゆるなどの形容を使わず「きま
りけり」と即座に捉えた。色と光に焦点を絞った一句
鶏頭の美しさを詠んだ句で随一と思う。人生諷詠を理念
とした万太郎だが、自然描写においても卓越した技と天
性の詩人であった。季重なりの句であるが両方の季語が
絶妙に働きあっている見事な名句。

大室恵美子

久保田万太郎の句

一月やよく日のあたる家ばかり

『草の丈』昭和二十七年

街を歩いていると日当たりの良い家が目につく。それにひきかえの思いが「家ばかり」の措辞で伝わってくる。「二月や」の季語も適切に思いを代弁している。

万太郎先生は季語を生かす名人と言われたのもうなずける。また「日のあたる家ばかり」「春の夜どれがほん」とのように普段使いの言葉でまとめられるのも独特だ。先般神田明神下の旧居を拝見してきた。

吉川隆

燈下集



○ 吉澤恵美子

国民の声こそ命ソーダ水

焼餃子大皿に盛る夏休

濯ぎもの大きく干せる大暑かな

夕爾忌や西空赤く暮れのこる

スープのさめぬ距離とはいかぬ秋簾

○ ト部黎子

今朝秋の一合炊きの匂立つ

人里のこゑを遠見に帰燕かな

鯛の夕べひと恋ふじブラート

夕鴉や日記にのみに吐く弱音

敗戦忌ひとそれぞれの七十年

○ 卯木堯子

焼け跡で父待ちし日や終戦日

銘水に朝顔紺を深めけり

教会の庭のバリトン秋の蟬

老齡のソプラノ教室秋うらら

秋思いま神の御旨に委ねけり

○ 近藤牧男

雨がちに東京の盆過ぎにけり

今だからはなせる話敗戦日

このところ電車のなかも夏休

新涼や水面に風の走り書き

ついと来てかろき影置くとんぼかな

○ 深川 敏子

月見草亡き人の文字美しく(篋)

高らかに選手宣誓雲の峰

守備位置にイちて黙禱原爆忌

選手らの固き拳や汗滂沱

球場に秋の夕日のなだれ込む

○ 和田 幸江

小さき幸連れて狭庭に小鳥来る

ふる里の家にあがれば涼しけれ

夜の秋や間違ひ電話そつと置く

ブティックの窓の絵硝子秋立てり

夫の忌のさはなる白き桔梗かな

○ 大室 恵美子

こくうすく朝靄ながれ吾亦紅

杭の先選り好みする蜻蛉かな

今どきの父親やさし稲びかり

さりげなく矛先そらす秋扇

つくつくし弱気の夫へ言ふ強気

○ 尾野 奈津子

ためらひつ波の砕くや水面月

新涼や島の水路の舫ひ舟

石庭の白砂乱るる月の秋

鬼灯を鳴らし女の意地通す

跳ね返るポップコーンの残暑かな

○ 小嶋 恵美

立秋や大鍋掛かる外厨

重箱を洗ひ重ねし竹の春

百代の過客なりけり小鳥くる

マンドリン置けばごろりと秋の影

秋扇ゆるくつかひて人を恋ふ

○ 三宅 文子

十六夜や昔の恋は文を書き

遠花火帰したくない人ひとり

マルガリータの塩ききすぐる夜の秋

素踊りの汗見せぬ顔菊之助

通夜のあとひとりとなりし天の川

当月集

安立 公彦選



○ 齋藤晴夫

白樺の風の囁き秋立ちぬ

群青色は神代のままの秋の空

夏瘦せて枯淡の風姿ありやなし

老楽に居る答のあり敗戦日

夕蟬の今を大事に鳴き継ぐも

○ 赤岡茂子

終戦忌七十年の過去世かか

夜濯や父の忌日の里泊り

戦下の救護生き残り来て秋扇

風待ちの頷く雨後の萩一叢

雲の透く箱根連山秋日果つ

○ 小淵二美江

風入れや夫の遺しし旅靴

雲疾き夜空みてゐる文月かな

仏壇の供華の水沸く終戦日

機上より鯖雲に透く故山かな

秋蟬の雨に鳴く声聞く夜かな

○ 永井恵子

残暑いまいくさの記録放映す

鯛や母永眠のその後も

起重機の伸びゆく先や鬮雲

手鏡を差し出す歯科医秋の昼

一向に売れぬ宅地や猫じやらし

○ 佐藤博重

萩咲いてたちまち風の道となる

夕風の踊やぐらに灯の入りぬ

初つ端は多摩太鼓連盆をどり

もう一回金魚掬ひの輪の中へ

かなかなの日の出を待たず鳴きにけり

春燈の句

安立 公彦選

生かされて生ききし齡草の花

東京 石原 節子

糸とんぼ小さき水輪の生れにけり

先人なほ詠み余したる芒あり
難聴の昂じてをりぬそぞる寒

秋日傘川に映して橋渡る

天袋の中まだ昭和や秋彼岸

夕鐘の鳴りわたるなり雁渡し

露の世のままならぬ身の残暑かな
独り言も生くる証や秋暑し

牛乳にうすき膜張る今朝の秋

東京 池田 節

報謝受くる解夏の尼僧のお辞儀かな

秋蟬のつまづき鳴くは孤独なる
ひぐらしの奥多摩道や塩むすび

露店立つ地藏通りの残暑かな

東京 土屋 光男

新涼や新看護師の清々し

霧の谷先行く人を包みけり

土に浸む球児の泪西日中

神奈川 石田 康明

大丈夫とふ励まし嬉し今朝の秋

敬老をうくる身となる寒露かな
七十年不戦の空やいわし雲

再検査待つ間蝸ひとしきり

茨城 山崎 刀水

乱調の季糺すかに法師蟬

筑波嶺に雲無き日なり大根時く
高下駄の青春ありき星月夜

用無きをまた庭に出て天の川

神奈川 新海 英二

徒ゆくに適ふ花野となつて来し

秋草や享年若き墓並ぶ
草の花手向く日暮の無縁墓地



東京 織田喜美子

余言

安立公彦

迎ふるも送るもひとり盆供養

佐藤 信子

盂蘭盆の初日の夕方、祖先の精霊を迎える為に焚く「迎火」、その最後の日に焚く「送り火」、ともに盆会を象徴する親しみの籠る行事である。しかし現在の門火の実状は大きく変わって来ている。都市部に住む人の大方は、門火を自宅の仏壇で焼香するという形が多かる。形より心が大事と言うが、形によって心を顕すのが宗教である。

作者はいま盂蘭盆会をとぶらい、故人の冥福を祈念している。焼香の香のこもる中、「迎ふるも送るもひとり」という思いが目すと湧いて来た。その思いの中には、ともに門火を焚いた家族の姿がある。「ひとり」という言葉が「盆供養」という行事を通して、現代社会の一面を遍く表現している。調べの良さが、読む人の心を捉える句だ。

一門に夕爾忌があり空青くあり

松橋 利雄

八月四日の夕爾忌も過ぎた。翻って、春燈入会四か月目の夕爾の訃は、春燈については全く未知な初心者にも重く響いた。ましてや先師先進の思いは如何許りか。

春燈一門の重鎮については、来年度の誌上でその一部の評伝が掲載される。覚範、梨屋、晋、鏡太郎、誠、閑山、啓二、閑子ほか、多くの先進が「春燈」を守り育て上げて来た。先者はいま、夕爾忌を修しつづ、「一門に夕爾忌があり」と首肯する。そこには木下夕爾を春燈一門の要とする思いがある。しかし回想だけではない。「空青くあり」に、先進を継ぐ諸氏の精進への熱い思いが感じられる。

新生姜いきいきと朝動き出す

木多美美子

八月本部句会で特々選に頂いた。歳時記によって「新生姜」の扱いは異なる。日本大歳時記では、主季語生姜の傍題として、薑、葉生姜、くれのはじかみがあり、角川の歳時記では、新生姜、葉生姜、薑を生姜の傍題とし、これが大方の歳時記の扱いとなっている。

この句、「いきいきと朝動き出す」がみごとだ。折しも新涼の候、一日を踏み出す朝の前向きな姿勢が、新生姜の爽やかな香りと相俟って、新鮮に表現されている。

夏の夜を自販機ひとと点りをり

生方 義紹

飲料用自動販売機の普及は目覚ましい。人の集まる場所にもとより、この句のように、夜は歩行者も余りない道端にも置かれている所がある。その自販機が行き来の絶えた道の辺に、自らの照明を恃むかに立っている。それを作者は「自販機ひとと点りを」と表現する。適切な表現だ。背景の「夏の夜を」が、その適切さを増幅している。ちなみに「自販機」は自動販売機の略と、辞書にも記載がある。

新涼や風に光にありがたう

棗 怜子

私たちは現在自らの置かれている「場」を、恰もそのことが当然であるかに思い込んでるのが普通だ。個々の暮しはそうであろう。しかし、目を転じて、生活の原点ともいべき自然の環境を思うとき、吹く風、降る雨、四季の巡り、更にはそれらの起原とも言うべき日輪と大地の存在を、立ち止って考えたことがあるだろうか。

この句を見て、私自身、思考に鞭打たれる思いがするのだった。「風に光にありがたう」、まさにその通りだ。この十二文字は、また俳句の起点でもある。

黄ばみたる葉書とり出す終戦日

藤原 若菜

七十年前の八月十五日、太平洋戦争は天皇の「終戦」の詔書放送をもって終わった。当時の映像、中でも皇居前広

場で頭を垂れて落涙している人々の姿には、いつ見ても胸をうたれる。終戦の時私は国民学校六年生だった。

掲出句を見ると、当時のことが断片的に思い出される。子供ころに、敗戦を納得するには時間がかかった。この句、「黄ばみたる葉書」が、貴重な歴史の証言となつて、句を見る人の胸を打つ。恐らく戦中の葉書、それも近親の葉書だろう。「とり出す」とあるから、平素は文筥に仕舞われてあるのか。終戦日の一つの記録をなす句だ。

八月十五日湯気立つ飯の白さかな

中村紀美子

八月十五日を大方の歳時記は、「終戦記念日」を主季語とし、終戦日、敗戦日、敗戦忌の傍題を付けている。記念日という表記には、思い出に残る日という意味がふかい。「終戦」という言葉を残すなら、終戦日、終戦忌だろう。

この句、その終戦日を八月十五日と表記する。終戦日と八月十五日では語意が異なる。八月十五日は、生活の中の終戦日という意味が強い。当時を知る人にとっては、この句はまさに七十年前の生活を思い出す一句である。私の郷里の裏庭は畑となり、母は野菜作りに苦労した。いま、「湯気立つ飯の白さ」を見つめる作者、当時は見ることもない出来ぬ景だ。湯気の立つ御飯の豊かな香りに、当時を振り返る思いが沁みじみと感じられる。「白さ」が絶妙だ。